

地軸も揺らぐ砲声に

見よ 大空は晴れわたる

—後 略—

## 豊橋工兵第三連隊の想い出

愛知県 熊田 敏夫

昭和十二（一九三七）年七月、支那事変が勃発。国内は戦時色が濃くなり、毎日のように応召の赤紙が来て、町のあちらこちらには、「祝入営」の幟が立ち、日の丸の小旗を手に手に「万歳、万歳」と出征兵士を見送る姿が多く見られた。

昭和十四年、桜も葉桜となった四月十五日の昼過ぎだった。役所の小使いさんが「熊田さん来たよ」と言つて召集令状を持って来た。来るとは覚悟はしていたが、いざ令状を手にした時は感無量の気持ちであった。当時、男として軍人として、出征兵士になったことは、この上もない名誉と思つてはいたが、心の引き

締まる思いでいっぱいだった。

それから五日後である。いろいろと身の回りの整理やら、親族への挨拶回り等をすませ、昭和十四年四月二十日、万歳の声に送られて豊橋工兵第三連隊第二中隊に入隊、第五班に編入となった。今までの一般社会とは、まるで別社会とも言うべき軍隊生活の始まりである。

厳しい内務班の教育、一般歩兵の訓練、演習等、三カ月の教育後、本職の工兵隊としての特技訓練である。破壊された道路の改修、あるいは渡河作戦の架橋作業等が我々の任務であった。このような実戦訓練は昼夜を問わずの猛訓練である。

河幅百メートルの場所への架橋工事の訓練の時だった。昼間は敵に見つかり攻撃されるので、真っ暗な夜のことだった。水泳の達人な者を選抜して、はじめに体に細いロープを巻き、流されながら向こう岸へ着く。太いロープをたぐり寄せながら向こう岸の立ち木を見つけてこれに縛り付け、こちら側も立ち木を見つけてこれに縛り、太いロープを皆でピンと引つ張

る。このロープに舟をつないで、この舟の上に橋桁を乗せ、さらに板を乗せて橋を造るのである。

この時の訓練で、自分は河の中程まで泳いでいったが、急に右足がつって動けなくなり、どんどん川下へと流されていく。呼べども叫べども河の流れの音で聞こえない。幸いなことに腰に細いロープを巻いていたので命拾いをしたのを忘れられない。

また、水深一メートルぐらいの河で幅二、三十メートルの渡河の場合は、人柱と言って橋桁を何人かで肩に担いで、その上を歩兵が渡る。我々は縁の下の力持ちといった任務である。このような訓練はやがて戦場で実際に体験もし、役立ったものだった。

同年九月下旬、いよいよ第一線の南支への出兵準備の編成が始まった。現役兵に補充兵、そして予備役、後備役のほとんどが大正生まれの古兵ばかりである。

第三十八連隊長に田山大佐、中隊長に藤井中尉、小隊長に小長谷少尉である。昭和十四年十月十三日、豊橋工兵第三連隊の営門を出発。沿道の大勢の人々に見送られ豊橋駅まで行軍し列車で大阪駅へ、大阪港より

三五〇〇トン級の民間から借りた貨物船で瀬戸内海を出航したのだが、台風のため途中で三日間ほど停泊し再び出航、玄界灘に出たら船は木の葉のように舞い、さすが陸の達者も船酔いで、あちらこちらで「ゲーゲー」と、食事もとる者はほとんどない状況であった。幸い敵潜水艦の攻撃も受けず十月二十三日夜、無事に上陸することが出来た。

二十五日、順徳県の戸数三〇〇戸ぐらいの部落に到着した。ここは仏山、九江、江門に通じる幹線道路に面し、珠江の支流で河幅が二〇〇メートルほどあった。そこには民船で架設された舟橋が架かっていた。台湾工兵守備隊が警備に就いていたが、我々の部隊と交代となり、この地の警備に着任となった。

仏山には師団司令部があり、命令はここから発せられたのだった。賓陽作戦は昭和十五年一月十八日から二月十九日。昭和十五年の正月を迎えて、兵隊達はそれぞれ故郷へ手紙を書いたり慰問袋のキャラメル等を分け合って思い思いの談話に興じていた。

正月の十五日だと思ふ、いよいよ作戦に参加するんだという話で心浮き浮き、何と言っても戦地にいるとは言いながら初めての实战に出るのだから無理もない。

一月十七日午前八時、部隊は兵舎の前に整列。「部隊は欽州へ出動」との命令で船で欽州に上陸し、ここで南寧賓陽方面に行く道路の改修並びに架橋作業が任務であった。今まで居た駐屯地では实战に備えた演習であったが、今度は実際に敵が破壊していった道路または橋の補修工事である。現在のようにブルドーザーとかユンボでもあればわけなく出来るのだが、当時の戦地では、何といつても自分達の手でやらなければならぬ。ましてやいつ敵が攻撃して来るかわからない。のんびりしてはいられない、短時間で終えなければならぬ。裸でフンドシ一本、胸まで水に漬かっての杭打ち、または丸太を見つけての橋桁運搬、肩から血を流し、手の平は血豆でひりひり、しかし休む暇はない。

やっこの思いで架橋の補修が終わったと、一息つい

て休憩していたら敵が背後から銃撃して来た。我々工兵隊には戦闘武器を持っていないことを承知しているのだろう。裸の者はそのままの姿で銃で応戦しながら、元の出発地点まで撤退せざるを得なかった。

四月二十日、豊橋工兵第三連隊から小布の駐屯地に現役兵約二四〇人程が到着したので勇氣百倍、元気づいた。

南支は五月から六月になると雨期に入り、毎日毎日雨が降る。スコールと言つて、大粒の雨が一時間くらい降り、後からりと晴れ間になる。また曇つてスコールが降るといつた南支独特の気象である。凹地はほとんど沼地と化し、軍行路も低地はほとんど水浸しで、特に馬匹の行軍には大変だった。

自分達は毎日のように、雨の中を胸まで水に漬かりながら架橋工事をした。難工事だった。ようやく架橋工事が終わった夕刻、誰かが「オーイ、ここに温泉が出てゐるぞ」と言うので行ってみたら、大陸には珍しく温泉が小川に流れ出ているのだった。兵隊は今まで

水に漬かって冷たくなった体を温泉に入れるというので小躍りして喜んだ。早速、穴を掘って湯室を造っていい気分が入っていたら、またまた敵に発見されて銃撃を受け、真っ裸のまま飛び出て土手の陰にかくれた。幸いこの日は歩兵一個分隊が護衛していたので、軽機関銃で応戦、撃退してくれたが、この時、不幸にも一名の戦死者を出した。

翌昭和十五年四月、十五年徴集の初年兵が入隊して来たので、初年兵係を命ぜられ、三カ月間の教育を行う。自分達が味わった初年兵当時の苦しい内務班教育、そして演習、特に、誰しもが味わった教育時のビンタは、あのようなつらい思いは、出来るだけやりたくないと思った。しかし、どうしても教育上やむを得ず、二度ビンタをくれたことがあったが、復員後その者達と戦友会等で会った時、心から謝罪の念にかられたものだった。

昭和十六年六月十四日、内地帰還の内示が伝達され八月にいいよ内地帰還が決まり、懐かしい郷里を夢

見つつ、一路宇品港に向かって船上の者となった。当時はまだ敵機や潜水艦の攻撃も受けずに、無事宇品港に上陸することが出来た。検疫後の八月四日、豊橋中部第十一部隊に到着、八月六日、除隊となった。

## 広東戦線異常なし

愛知県 加藤 薫

家は代々農業でした。私が小学校高学年の時、父が亡くなり、男三人、女二人の子供と母親で途方に暮れました。次男の私が口減らしのため、竹内洋服店に住み込みで働くようになりました。高等小学校を出たばかりで家の恋しい年頃でしたが、そんな感傷的なことは言っておられませんでした。一日も早く職を身につけるため夜も寝ずに働きました。

昭和十二（一九三七）年三月、年季奉公が終了し、昭和十三年四月から平田町の村瀬洋服店の店員となりました。丁稚奉公中、辛いと思ったことは一度もあり